

令和3年度 第1回 釜石市社会教育委員会議 開催結果

- 1 開催日時 令和3年6月11日（金） 13時30分～15時10分
- 2 会 場 釜石市教育センター5階 岩手大学釜石教室
- 3 出席委員 9名
柴田渥委員、吉田千秋委員、及川靖浩委員、柏館秀一委員、鈴木広樹委員、齋藤健委員、石垣邦子委員、三浦幸江委員、菊池亮委員
- 4 欠席委員 3名
山口邦子委員、猪又信幸委員、吉岡真美委員
- 5 事務局等 11名
高橋勝教育長、紺田和枝教育部長、菊池公男市民生活部長、佐々木豊スポーツ推進課長、藤井充彦文化振興課長兼郷土資料館長、手塚新太文化振興課課長補佐、佐々木寿郷土資料館館長補佐、平野敏也まちづくり課長、佐々木薫まちづくり課主幹兼生涯学習係長、浦城太郎まちづくり課主任、佐々木慧まちづくり課主事
- 6 傍 聴 者 1名
- 7 経 過
 - (1) 委嘱状交付
会議に先立ち、新規委員2名に、高橋教育長から委嘱状を交付した。任期は、前任者の残任期間とし、令和3年12月31日までとする。
また、本年度初の会議開催であるため、事務局を紹介した。
 - (2) 開会
まちづくり課佐々木主幹から、本会議の委員出席は12名中9名が出席しており、「釜石市社会教育委員会議運営規則」第5条の規定により定足数(半数以上)を満たしていることを告げ、会議の開会を宣言した。
 - (3) 教育長挨拶
教育長の高橋と申します。今年度もよろしくお願ひいたします。本日は大変お忙しい中、そしてこのようにお暑い中、ご出席をいただきましたことに感謝いたします。本当にありがとうございます。また、委員の皆様におかれましては、当市の社会教育をはじめとする各種事業にご支援、ご協力をいただいておりますことにも厚く御礼申し上げます。

本会議は、社会教育が中核的存在となっている当市の生涯学習の推進を図ることを目的として、幅広い分野から委員を選任し、生涯学習関連事業に関する意見、提言を賜り、事業に反映させることを目的として開催しております。

当市では、学びと実践が循環する生涯学習社会の形成のために、地域の実態に即し、各種公民館事業を実施している他、地域ぐるみで子どもを育てていく環境の構築を目指し、地域学校協働活動などの取り組みを進めております。

また、芸術・文化に関しましては、活動の発表の場や質の高い芸術鑑賞、及び文化継承活動への支援を行うとともに、今年3月に国の史跡に指定された屋形遺跡をはじめとする文化財の適切な保存、保護、活用に取り組んでまいります。

スポーツの推進につきましては、令和元年度には、市民体育館が完成し、ラグビーワールドカップ2019日本大会が当市において開催されるなど、スポーツに対する関心や期待は一層高まっています。今年度は、東京オリンピック・パラリンピックの開催年であり、ラグビーワールドカップ2019日本大会メモリアルイベントの開催も予定しているところですが、昨年度からの新型コロナウイルス感染症の影響により、事業の中止や規模の縮小、方法の変更などの様々な対応が求められています。

このような中ではありますが、「新しい生活様式」の実践や感染防止対策を徹底しながら、「地域と人のつながりの中でみんなが育つまち」の実現に向けて、各種講座の実施や芸術文化活動の推進、市民スポーツの振興などに取り組んでまいりたいと思います。

皆さん、ご存じのとおりラグビーワールドカップでは本当に釜石市民の一体的なつながり、それから釜石市民だけではなく世界中の人々とのつながりを感じたところだと思えます。また、生涯学習においても公民館活動を通して、いろいろな人がつながっております。地域の大人はもちろんのこと、子どもからお年寄りまでのつながりもつくられております。今後、このように人々のつながりを作るためには、スポーツが果たす役割、公民館活動をはじめとした社会教育、そして生涯学習の働きというのが非常に大きな役割を果たすと認識をしております。

本日の会議においてもそのことを踏まえながら、令和3年度の事業方針及び計画等についてご審議をいただき、そして委員の皆さんにおいてはどうか忌憚のないご意見をお寄せくださるようお願い申し上げます、私の挨拶としたいと思います。

本日はどうぞよろしくようお願い申し上げます。

(4) 社会教育委員会議議長挨拶

どうもご苦労さまです。

出生率低下ということでちょっとお話をしております。日本全国の出生率が昨年度は最低だったわけです。また、釜石においても、毎年、ずっと最低で来ているわけです。そういう中で、実は先日、ヤングケアラーという言葉を知りました。かつて年老いたおじいさん、おばあさんの介護をして、面倒を見ていくという、家族同士の中で当たり前のこととしてやってきたことが今、都会のほうでは、ヤングケアラーと呼べるような人たちが結構、居るそうなんですよね。

学校に行く時間、それから学校を休みがちになったりする介護に携わる子どもたちのことを指しているわけですが、原因はご存じのとおり、高齢社会なわけですから、60歳以上

の人が非常に多いわけです。先ほども言いましたとおり出生率が少なければ、子どもが少なくて、それを担う人たちがいないので、やっぱりこれは大きな問題を抱えているというふうに思いました。

社会教育と学校教育の接点をいかにして持っていくかがとても重要ではないかな、と思います。地域においても元気な方たちは学習意欲を非常に持った方がすごく多いわけです。ところが、このコロナという存在で、それが全然できなくて、皆さん、足踏みをしている状況が多い。子どもたちを抱えながら働いたりしている若い世代の親たちも、なかなかそこら辺が上手くいかないでいるのが実情なわけです。

私たちは社会教育委員という名前で今、ここに集まっているわけですがけれども、いかに釜石市の教育状況の中で、社会教育というものをもう少し強く打ち出しして、どんどん次世代の人たちを育てていけるような、そういう仕組みづくりをしていければいいんじゃないかなと思っております。

簡単ではありますが、挨拶と代えさせていただきます。

(5) 協議（議長の進行により協議）

①令和3年度 釜石市生涯学習・社会教育行政方針と計画について
協議資料(1)に基づき、事務局(各担当課長)が説明した。

②令和3年度 社会教育団体に対する補助金の交付について
協議資料(2)に基づき、事務局(まちづくり課主幹)が説明した。

③その他
特になし

(6) 報告

①釜石市立公民館自主活動グループについて
②令和2年度 公民館利用実績について
報告資料(1)および(2)に基づき報告した。

(7) 閉会 15時10分

事務局より閉会を宣言した。

8 委員からの発言・意見

(A委員)

自分は今日、釜石市のスポーツ推進委員という立場で参加させていただいております。私は、スポーツ推進委員ということでいろんなスポーツ、特に生涯スポーツ、市民の健康づくりや学校でのスポーツ好きの子どもを増やすとか、そういった部分でウォーキングとか、健康体操、ニュースポーツを利用したレクリエーションを行っております。ニュースポーツは、約25種類くらい、幼児から高齢者までいろいろな年代に合ったスポーツを用意しており

ますので、ぜひ学校の親子レクとか、市P連の交流会とか、そういった部分で我々を活用していただければ幸いと思っております。今日、あいにく、公民館館長さんが不参加ということで残念ですが、公民館事業の中でお手伝いできれば、喜んで親切に参加、指導していきたいとそう考えておりますので、よろしくお願いいたします。

最近、嬉しいニュースといえますか、気になったことがありました。今年の4月の中旬ですけども、ある公民館でこいのぼりが30匹ほど宙を泳いでいたわけです。すごくいいなあと思っていたわけです。ちょうど通学路なので、子どもたちが歓喜の声を上げて、いいなあ、と思いました。

その公民館は今年館長さんが代わって、新しい館長さんになったんです。去年と今年、ほとんどの館長さんが新しくなっているようです。ここにおられますまちづくり課の課長さんをはじめ、職員の方々もほとんどの方が新しくなっているようです。そういった中で、ぜひまちづくり課の職員の方々、そして公民館の館長さん方、これまでの固定観念に捉われず、ぜひ斬新な発想、アイデアを持って、そういった新しい部分にチャレンジしていただきたいなど、そう考えているところです。

最後に一つ提言をお願いしておきたいんですけども、先ほど報告の中で公民館もコロナウイルスで今まで違う内容になっていますよ、ということをおっしゃっていました。去年の話ですけども、館長さんが消毒液を持って、館内をくまなく掃除しているわけです。トイレから、ドアノブから、スリッパの一つから、館長さんが消毒していました。そういったことを私、目の前で見ておまして、掃除のおばさんは午前中くらいいるようですけれども、市のほうとして公民館のそういった、専門の消毒する方を配置できないものかな、と。それができなかつたら、例えば、掃除のおばさんに午後まで2時間くらい居てもらって消毒してもらうとか、近場の町内会の方に相談してもらって、1時間でも、2時間でもそういった消毒専門に有料で協力してもらおう。そういった形を取れば館長さんも、それこそコロナですっかりそっちのほうに集中してしまっただけで本来の事業ができなくなっているというような見方を私はしましたので、学校でも今、そういった専門員といえますか、おりますよね。消毒係といえますか、補助員といえますか。

(高橋教育長)

昨年度は、どの学校にも入っていたんですけども、今年度は入っている学校は限られています。

(A委員)

そういった形で配置していただけないものかな、という私からの提案です。よろしくお願いいたします。以上です。

(議長)

はい。誠に館長さんたちにとっては、ありがたい提言だと思います。

それでは、校長先生のほうから一言、ご質問でも何でもよろしいですが。

(B委員)

質問といいますか、今年度初めてなりましたのでどのような形でこれまで推移してきているかということも含めて、分からない部分がいっぱいあったんですが、先月、釜石公民館の運営に関わっている会議に出させていただきました。その中だけでみても、かなりの行事、取り組みが年代層にわたって行われている。そして、それもコロナの影響もありできないこともたくさんあったんですが、それでもできる方向を探りながらやってきている。そういう取り組み方に敬意を表したいな、と思っておりました。

学校のほうも同じように、できること、できないことがありました。昨年度、今年度もそういう形で継続しているわけなんですけど、そうやって、できる方向を探りながらやってることをいろんなことで発信しました。この資料を渡されたときに見たんですが、どこの公民館さんも地域に沿った取り組みされていて、これはすごいな、ということに改めて感じた次第であります。

小学校に関連したものとして二つ、今年度新しい取り組みを載せていただいております。青少年劇場の部分はちょっと今年度は行われなないということですが、まだ正式決定ではないということですがけれども、小学校児童向けのコンサートに向けてということで非常に感謝をしているところです。

学校としては、いろいろな部分で地域の取り組みにも協力できる部分は声を掛けて、参加するように働きかけをしていくことは、大事ななと思っておりました。ただ、やっぱりいろんな事情を考えてみますと、家庭での生活の在り方も一昔前とは変わってきている。自分たちの生活を大事にすることも必要なんですが、地域との関わりということになるとなかなかうまくかみ合っていないところも見受けられるな、というところがありました。学校としてできる部分と、地域からの要請に応えていく部分と、いろいろ悩みながらも今年度また続けて、学校としても地域のほうに入っていければと思っておりました。

それで、協議の(2)資料ですけども補助事業一覧の予算額というのは、令和2年度の結果が出ていると思うんですが、それに対して、どの程度変動があったものかという部分がちょっと分からないなと思いましたので、伺いたいと思います。

(議長)

それについて、簡単に事務局のほうから。

(佐々木まちづくり課主幹兼生涯学習係長)

生涯学習の分野につきましては、教育振興運動協議会活動補助金20万円と釜石市PTA連合会活動補助金10万円なんですけど、これは昨年度と全く同じ金額となっております。活動の中身としても教育振興運動協議会さんのほうは、各中学校区を範囲として一つずつ実践区、市内に5実践区があるんですけども、そこでの活動資金を提供している。使い方としては、それぞれ実態に即したものに使っているという実情があります。市P連の補助金のほうにつきましても、実は、昨年度はコロナの関係で研修事業が中止になっているんです。今年度はそれができるものと見越して、今のところ同じように10万円ということで計上させていただきます。

(藤井文化振興課長)

芸術文化のほうは、金額的には同じです。活動に対する補助金ということです。

(佐々木スポーツ推進課長)

スポーツのほうを説明させていただきます。スポーツの補助金もほぼ例年並みという形になっていますけれども、一番大きい7番の「いわて・かまいしらぐビーメモリアルイベント実行委員会負担金」。補助金ではなく負担金という形になっています。昨年度行ったメモリアルイベントは、釜石シーウェイブスとクボタスピアーズの試合を中心に行いましたけども、今年度当初予算を編成する段階でワールドカップで中止になったナミビア対カナダを目指して、観戦してもらおうということから、去年よりは金額が大きくなっているところがございます。また、20番の新規となっている「東海市スポーツ交流事業」でございますが、今年度は東海市側から釜石市のほうに来ていただいて交流をするということで、隔年で今年釜石が行ったならば、来年は東海市が来るというような形でやっている事業でございます。去年なかったものですから、今年新規という形になってございます。

その他、スポーツ大会開催及び参加事業という形で補助金が各5万円ずつありますが、今年度は釜石で新しくやりますよ、というときに補助金が出たりしますので、ほとんど去年と同じ内容となっておりますので、あまり変わりないと思います。

(C委員)

私、この後また会議があるので、発言だけさせていただいて、中座させていただきたいと思います。今の大切な子どもたちが、小、中、高校を含めて学校の職員だけでなく、地域の教育資源とか、地域の方々のお力をお借りしていこうという時代になっております。そういう意味では、高校も積極的に学校外に出て、いろんな交流をしていきたいと思っております。

子どもたちは、今、自分たちがこうやってやれるのは、先人のえいといいますか、お年寄りの努力があって今、この時代があるんだと。しっかりと先人の頑張りを分かって、そしてお年寄りに対して優しい気持ちを持てるように、そんな子どもたちを育む必要があると思っております。そういう意味でも、お年寄りと交流する場面というのは、高校生でも必要だと思えますし、小さい子どもですと、お年寄りと遊ぶとか、高校生くらいになると逆にお年寄りにこうしましょう、ああしましょう、と働きかけることもできます。一昨年度は「e-スポーツ」、ゲームを通して施設に行ってお年寄りと交流したり、すごくお年寄り方が喜んでくれたということもありました。もちろん、学校の行事や授業の合間でということになるので、すべてにお応えはできないかとは思いますが、何かお役に立てることがあれば、積極的に声を掛けていただければ思っています。

少子化とか、釜石市の人口減とか、いろいろな問題があるわけですが、私自身は高校の責任者として地元に残れという指導はしたくないというふうには思っているんです。基本的に、やっぱり子どもたちは将来にいろんな夢を持って、世界に羽ばたく子もいれば、東京に行っているような夢を追う子もいます。ですから、いろんな将来の選択肢をしっかりと高校として子どもたちに提示をした上で、その上で、大学に行けば一度地元を離れるわけですが、そういういろんなことを経験、そして知識を得た上で、地元に戻って頑張ろうとか、おれは東京で活躍するんだとか。やっぱり基本的に大事なものは釜石で生まれ育って、釜石で学んだ

子どもたちがどの場所でもいいから、いきいき活躍しているということが一番大事なことだと思っています。ですから「戻って来い」「戻って来い」というふうにある意味洗脳するような教育は良くないないんだらうな、というふうに思っています。子どもたちが自分の持ち味をどう、いろんなまちで発揮できるか。その上で、地元に戻って来て頑張ろうというそういう気持ちを持った子を積極的に受け入れる土台が釜石にあればいい。そこで仕事をして生活できるベースがないと戻って来れないので、その部分は釜石に限った事ではないんですが、やっぱり人口減の市町村の大きな問題なんだらうなと。ただそこは、言うのは簡単ですが、すごく難しいことだというふうに思っています。少なくとも、教育機関とすれば、釜石で学んでよかった、そして釜石で学んだ子どもたちがいろんな場所で活躍しているということが地元にいる市民の人たちにとっても、そこに関わった学校関係者にとっても一番うれしい事なんだらうな、と思っています。

あと、ラグビーについては、市長さんから直々にお話を伺いました。積極的に協力していきたいな、というふうに思っています。ただ、実状を正直にお話ししますと、釜石高校のラグビー部員は、3年生が引退して2名です。要するに7人制ラグビーすらできないのが現状です。釜石商工高校さんも多くはないというふうに聞いています。私も大船渡出身ですので、釜石のラグビーがすごく盛んだっころを良く分かっていますし、盛り上がっていたのも良く分かっているの、ラグビーは釜石のまちおこしにはすごく大事な部分だと思っています。ただ、高校の現状がそうだということは、やっぱり小さい頃からラグビーに関わる子どもたちを育てていて、それをどうやって高校までつなぐかというところが大きなポイントだというふうに思っています。事業が本格的に始まったばかりですので、これからというところですが、将来、釜石の高校から花園へというのが市長さんの夢のような部分もあるようですので、高校としてもシーウェイブスさんにお世話になっている部分もありますし、ラグビーをとおしてやれることは協力していく。いずれ市の関係の方、地域の関係の方、PTA、本当に多くの方々に釜石高校の教育に関わっていただいて、本当に助かっているな、というのが正直なところなので、今後とも、いろんなところで連携して進めていければな、というふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

(議長)

ありがとうございます。ぜひ、釜石で学ぶということの中に防災であったり、郷土愛の学習であったり、そういうのを含めながらお願いしたいと思います。

--- C委員 退出 ---

(D委員)

よろしく願いします。中学校を代表してきているという立場でございます。

私、中学校教諭になって40年弱、毎日のように思春期の子どもたちと関わっております。中学生が基本的に大好きであります。

子どもは地域で育てるものという話をよく聞きますが、正直なところ、地域の皆さんは他地区の話ですが、小学生を地域の宝だと思っている人は多いんですが、中学生はそうではない。小学生は可愛いけれども、中学生が来ると怖い。例えば、5人歩いているだけで通報され

たり、学校に電話がくるというふうなことが昔はありました。中学生というのは、実は東日本大震災でも証明されたように、すごく地域の力になるんです。いろんなことを表立っては、表面的に「はい」とは言わないかもしれませんが、お願いされた事や必要感があれば、すごく力を発揮するのは中学生だと私は思っています。

昨年度、私、こちらに来まして、甲子公民館さんの会議に出た時に100を超える事業がありました。実は中学生が参加するのは数個しかなかった。申し訳ありませんが、中学生が自分から手を挙げて「行きます」というのは、実はあまりない。人生の中で中学生というのは一番忙しいと思うんですよ。なので、公民館長さんには「いやいや、ゲストとしては行かないと思うけど、スタッフとして使ってもらえないか。土のうを積んでくれとか、テントを張ってくれとか、そういうのをどんどん。10人募集だといったら出ると思うよ」という話をしました。ゲストにはならないけど、お手伝いしたい子はたくさんいるし、中学校の部活動を終えて、部活を引退したのであれば、子どもたちは随分手は空くと思いますよ、という話をして、館長さんとはやろうと言いました。コロナで頓挫してしまったんだけど、多分、それは他地区でも言えるんじゃないのかな。それがその子たちにとっては1回、2回のボランティア活動であっても、多分、将来的に市職員であるとか、公民館事業に興味関心が高まって、戻って来るのはあるんじゃないかなと思っていましたので、中学生をそういう目で見ていただいて、どんどん働かせていただきたい。そういうほうが多分、頑張ります。よろしく願いしたいと思います。

もう一つは、今、中学校の教育界で大きな流れがあるんです。この4月から岩手県も釜石市も部活動に必ず入らなくていいですよ、と任意加入制がスタートしました。すごく大きいです。今年蓋を開けてみたら、釜石市内では最終的には11人が入らなかったです。多分、おじいちゃん、おばあちゃんが「クラブ何に入ったの?」と言えば、「入っていない」と言うのがそのくらい。強制加入させないと受け皿がないという時代がありまして、そこは躊躇していたんですが、今は受け皿があろうがなかろうが学校はそうになりました。部活動はしなくていいですよ。授業が終わったら帰っていいですよ。特にスポーツ関係においては、実際スポ少に入っている子たちも、今、スポ少といっても盛岡だったり、花巻だったり、北上だったり、夜に親が送り迎えをして、周に2回、3回行くという時代です。部活のいいところは、お金がなくても、どんな子でもスポーツや文化ができる。本当に大切な、世界に誇れる部活というものが、今はお金がある家、送り迎えができる、そういった傾向も出てきている。そういうことを周知していただいて、やっぱりそういう子たちへの体制づくりが必要なんじゃないかな、と最近すごく思っております。

あとは加えて、郷土芸能なんかもそうかな、と思っていました。学校の中で、今はコロナでお年寄りが来るということではできないので、2年間、ほとんどの小中学校でストップしています。これが3年目に復活するかといえば、もしかするとこのまま、郷土芸能というのが学校の中に入ってこれなくなった場合に、保存会の方々の心情を察するに非常に苦しいんだろうと。じゃあ、それを誰が受けるかといったら、地域だったり、行政だったりというのがすごく必要なかなと思っていました。いろいろ言いましたが、お分かりいただければ。

(議長)

はい。ありがとうございます。それこそ、震災から10年過ぎたんですが、震災の時に非常

に役に立ったのは中学生の力ですから。すごくたくましく、助かりました。

(E委員)

部活がそのとおり強制ではなくなって、入らなくてもいいという選択肢ができました。実際、必ず入部をさせたからといって、部活の人数がすごく多いかということ、多い部活もあるんですけども、野球部なのに10人いないとか、一学年で3、4人しかいないとかというのもざらにあるので、そこは少子化というのも含めて、仕方がないのかな、というのは思います。

ただ、学校としては、他の興味のあるものに充てたいという理由があるので、部活に入りませんというのがあれば、いいですよ、というスタンスだという話を聞きまして、大概の子は入るのかな、と思いました。入ったからといってずっと続けれるかといえば、どうしても人間関係もあって他の部に移ったりとかということも出てくるので、そういったときのもう一つの選択肢として、部活そのものに入らないというのもいいのかな、というのは、思います。

それと、「釜石市成人のつどい」は基本的には20歳の子が対象になるのですか。

(平野まちづくり課長)

成人という定義が変わってしまって、18歳でやると受験といった部分もあるので1月の開催は難しい。そうであれば、いつ、どのタイミングでというのは、子どもたちのアンケートを基に決めたいなど。来年に関しては、もう時間がないので、20歳を対象に実行委員会形式でということを進めているところです。

(E委員)

成人のつどいの案内というのは、その市町村で生まれて、現在、住所が変わっている人にも行くんですか。

(浦城まちづくり課主任)

案内については、8月ごろ広報等を通して周知するんですが、市内にいない20歳の方は把握できないので、そういった人はお申し出くださいというのをとってしまして、お申し出をいただいた方には年末を目途に案内状を発送します。また、確認ができれば、当日というのも対応していただきましたので、なるべく幅広く受け入れられるように。

(平野まちづくり課長)

実行委員会形式とする中でも、今の在学中に実行委員会を立ち上げることができれば「2年後、みんなで集まろう」という流れにしていくと、そういった案内とか、なかなか他の市町村に住所を動かしていると、案内というのは難しいので。市内に住所がある方には案内が行って、それを引き換えにという形は取っているんですが、なんとかそういうところではないところで。

記念品に関しても、数十年前、私の時には文鎮というのがあって、今でも机の引き出しに入っているんですね。そういう、将来にわたって記念に残る物がいいのか、そういう部分も子どもたちがどう考えるかを非常に私たちも興味を持っているところです。それが実行委員会形式にするといったところの一番のメリットだと思うので、お盆ぐらいまでに来年の実行

委員会を立ち上げていきたいというのと、在学生に対してはアンケートを取っていきたいというところです。

(E委員)

進学する子たちがいると、どうしても住民票を移す子もいるし、移さない子もいるので、そういったあたりでどうなのかな、と。成人の案内をどうするのかなって思ったりしたので。

(平野まちづくり課長)

釜石にいなくても釜石市の成人式に来てもらうのは、全然かまわないので、そういった形で周知いただければ。あとは大学生、学生が今、なかなか買い物に行けなかったり、アルバイトもできなかつたりするので、釜石市の特産品をお送りするという、そういったものを委託しているので、そういったところでニーズの把握だとか、そういうのも利用しながら。あとは最近ではLINEの登録も釜石市であるので、そういった部分、広報やホームページだけではなく、そういったものを利用して周知して、ぜひ参加いただければという思いです。

(F委員)

体の不自由な子どもたちが学校に居た場合、どのような指導をしているのかな、と思いついて。普通の人と同じように教育をしているのか、それとも別な形で、分けて生活させているのか、その辺をちょっと知りたいな、と思いついて。昔は、体が弱くても何しても、体が不自由であってもみんなと一緒に生活したものだから、今はどうかと思って。

(B委員)

障がいにもいろいろな種類がありますので、体の不自由なというところがどの程度かというところにもよりますが、小学校、中学校に入って来る子どもたちにすれば、何かしら施設の補助になる事とか、あとは車いすで生活している子であれば、エレベーターがある学校に入学するという事もありました。まず、やれるところで配慮しながらいろんな活動をやってきました。あとは、どの程度できるかどうか、動けるかどうかによっても普通の小学校、中学校に来るのか、特別支援学校に入るのか、そこは違ってくるので何とも言えないところでもあります。それぞれの障がいの状態によったり、あとは親御さんの希望だったりで学校に来ながら生活をしております。今は、どこの学校に入ることがその子にとって望ましいのかというところを検討しながら来ているところです。

(D委員)

今の世の中の流れだと「障害者差別解消法」というのが6年前にできて、基本的に障がいがあっても普通の学校に入れましょうという話になっています。エレベーターとかいろんな施設、設備については、合理的配慮という言葉があって、できる範囲で入れることになります。ただそういう子たちがもっと別の施設、設備の中で生きていく方法があるのであれば、それは親御さんの判断でそちらを選ぶことができますが、強制は全くできないので、基本的には普通の学校で生活することはできます。

(G委員)

今までの話を伺っていて、私も高校生の子どもがいるんですね。先ほど話があったラグビー部に。商工なんですけど、今9人。15人制は出れなかったんです。7人制しか出れなくて、部活動も練習試合という、釜高の子どもたちと一緒に。子どもたち自身も人数が減っているというのもそうだし、中学校の野球部というのも今2人、3人しかいない。野球ができません。子どもたちが少ない分、やっぱり不便もいっぱいあります。

私、読み聞かせボランティアをやっているんですけど、子どもが少ないと保護者も少ない。ボランティアも、結局、皆さん働いていたり、小さい子がいたりというので、何をしても難しい。子どもが少ないというのが現状です。

さっき、成人のつどいの話をされましたけれども、今出ている話では、親御さんたちは「18歳でやっても毎日、学校で会っているよね」と。子どもたちにしたら一回働いたり、大学生にしろ、外の世界を見て来て、20歳で集まって「こうだったよ」と話をしたり、久しぶりに会ったり。20歳になって「久しぶりだね」と会ったのが楽しい。

(平野まちづくり課長)

大人になってから振り返ると、子どもたちが今の状況でみると、いろんな意見が出てくるかな、と。

(G委員)

コロナというのもあるんですけど、20歳になってお酒を飲めるようになって、成人式が終わって、そのあと皆で集まって、お酒を飲みながらつもる話もという。18歳じゃできないので。やったとしても「また明日学校でね、バイバイ」って終わるっていうのもちょっと、子どもたちにとっては20歳のほうがいいのかな、という親たちの話です。自分たちがそうだったのでというのもあると思うんですけども。というので、いろいろな意見が実際は出ています。

(H委員)

私は福祉の領域から参加ですので、主に特に高齢者の介護予防と社会教育、生涯学習の実践というところで、報告を聞かせていただいております。実はコロナ禍というのは福祉においても大きな影響を与えていますし、ニュース、テレビでは経済的な損失のことばかり報道されていますけど、実は高齢者にとっては社会参加の機会が失われる。公民館とかが制限されるということは社会参加の機会を奪われるというか、制限されるという現象が起きていて、それが長期化すると身体に対する影響、あるいは精神に対する影響というのはすごく大きいです。ただ、まだ大きな公式な発表、研究がされていないのですけれども、本当に怖い影響があるだろうなと思っていました。

福祉業界では、老化防止、認知症防止には「きょういく、きょうよう、びぼう」と言われていまして、「きょういく」とは教育ではなくて、「今日行くところがあって、今日用があって、少し忙しい」それくらいが老化防止、認知症防止に役立つんだよといわれていました。そういう機会である公民館の制限がされたときにすごく大変だな、と思っていたんですけども、各公民館長さんの工夫。さっきの消毒とかですね、ああいう努力があって、制限があ

る中でも本当に何とか社会参加の場、自主活動グループの支援をしていただいたんだな、というところがすごく大事だったと思っています。福祉と生涯学習の実践の場というのが、なんとか関係各位の協力、努力で保たれたのかな、と思っています。

ワクチンが今、これから広がりつつありますので、ぜひそのこれからもっともっと地域参加、社会参加をしたいという高齢者の機会が増えるでしょうから、公民館長さんたちの創意工夫でそうした機会を充実させていただければという期待を持っておりました。

(議長)

生活様式を変えてということが一言目には言われますけども、なかなかこれ、今まで何十年もこうして生活してきた、変えることは非常に難しいということも分かっておりますし、今、ワクチンの話が出ましたけれども、テレビやラジオでいろんなことが言われています。正直言って高齢者の身とすれば、ちょっと不安を今、抱えています、頑張っていきたいと思っています。

今日は、予定より時間がオーバーしてしまいましたけれども、皆さんからいろいろなお話が聞けましたから、大変良かったと思っています。

これで議長のほうは降りますので、事務局のほうにお返しいたします。